

表現の特性から密閉、密集、密接を避けられない舞台芸術は、コロナ禍に直撃された。劇場は3月下旬から6月までほぼ閉鎖され、再開後も苦境が続く。びあ総研の直近の試算で、今年のステージ市場は前年の2058億円から592億円へと3割弱まで落ち込む。

興行会社、劇場、劇団、制作会社が初めて手を結び、緊急事態舞台芸術ネットワークという組織をつくった。小劇場エイドなどさまざまな活動も生まれ、クラウドファンディングや財団の支援策も注目された。

大切なのはこれらの動きを政策的に統合し、永続化する視点だ。文化庁は560億円の支援策を打ち出したが、使いにくいとの声が少なくない。現場と行政をつなぐ独立組織をどう確立するか、議論すべきときだろう。

一方で、苦難から積極的な試みも生まれた。静岡県舞台芸術センター（SPAC）の宮城聡芸術監督は「電話演劇」や「訪問演劇」で孤立者

## 回顧 2020 演劇

# 苦難が生んだ新たな試み

劇団四季の新作「ロボット・イン・ザ・ガーデン」 阿部 章仁撮影



とコミュニケーションを結ぶ実験をした。社会的課題と向き合う演劇のあり方が進化している。

兵庫県豊岡市に移住した劇作家、平田オリザは地域に密着した劇団活動を始め、東京では困難になったリアルな演劇祭も実現した。有力な演劇人が地域に分散することは、パンデミックや天災のリスクを低減させる。

興行面で大きな位置を占めるミュージカル。オリジナル作の重要性が改めて認識された。海外のライセンス条項に縛られる「レプリカ・ミュージカル」は、映像化や改編ができない。劇団四季は気鋭の長田育恵（作）、小山ゆうな（演出）による力作「ロボット・イン・ザ・ガーデン」を発表、創作重視の姿勢を打ち出した。国内の制作基盤を強化する一歩といえる。

ミュージカルの今後を考える点では、藤田俊太郎の活躍が目される。英国で初演したオリジナル演出作「VOLTE」を逆輸入し、鮮烈な成果をあげた。藤田は「MINO」「天保十二年のシェイクスピア」でも演出のさえを見せた。

突然の公演中断は、演劇人に原点を見直す機会を与えた。まさに作り手の魂が入っているかどうかが問われた年であり、公演数は減っても秀作は少なくなかった。

創作劇では鄭義信作「五十四の瞳」（松本祐子演出）、ケラリーノ・サンドロヴィッチ作・演出「ベイジルトアウンの女神」、瀬戸山美咲演出「現代能楽集・幸福論」（瀬戸山・長田育恵作）が緊密な成果。演出作品としては、栗山民也の「殺意」（三好十郎作）、詩森ろはの「All My Sons」（アサー・ミラー作）、鶴山仁の「リチャード二世（シェイクスピア作）」名取事務所がパレスチナ演劇などで果敢な挑戦をし、異彩を放った。

歌舞伎は十三代目市川團十郎白猿の襲名公演中止という打撃を受けた。感染症対策を徹底する歌舞伎座は4部制をとった。高齢の人間国宝たちの奮闘を見るにつけ、世界に誇る芸能を絶やしてはならぬという決意を感じる。歌舞伎の裾野は日本舞踊や邦楽にまで広が

っている。無形の文化遺産をしっかりと支えたい。客席制限による経済的損失を埋めるため、映像配信と実演を混合するハイブリッド型興行が登場した。海外の先例どおり、優れた映像は劇場に足を向ける導入剤の役割を果たすと考えたい。

東京芸術劇場で先に公演した舞踏の田中浜が、カーテンコールで涙した。観客と身体を通じた交感ができたと感極まったのだ。「今、こゝ」で起こる一期一会の体験の価値を今こそかみしめよう。劇作家の別役実、山崎正和、歌舞伎俳優の坂田藤十郎が亡くなった。（編集委員 内田洋一）

許諾番号30079622日本経済新聞社が記事利用を許諾しています。

掲載日 2020年12月11日 日本経済新聞 朝刊 44ページ ©日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。